

# フィリピンとの架け橋

## 第7回ワークキャンプ特集



### 宣教の働きに触れる

フィリピン協働委員会 委員長 司祭 マルコ柴本孝夫

今年九州教区では「ミッション・スピリット《宣教力》に触れる」というテーマのもと教区大会を開きます。これは、宣教する力、すなわち神さまが私たちに託されている働きをもう一度しっかり見つめよう、ということだと思います。

しかし、じつは毎年開催しているフィリピンワークキャンプは、すでに宣教力に触れる大切な機会になっているのではないかと思います。

ワークキャンプという名前のプログラムですが、その目的は決して黙々とワークを行うことにあるのではなく、ワークを通してフィリピン中央教区の人々と出会い、一緒に過ごす。そしてこの不思議な出会いを通して、神さまが力強く進めておられる宣教の働きに触れることこそが重要なのではないかと思います。参加者たちはその一端をしっかりと感じ帰ってきたことと思います。どうぞこの報告書を通して、神さまの不思議な導きと、フィリピンの地で起こされている大切な働きを感じていただければと思います。

参加者から報告を聞きますと「フィリピンで過ごす一瞬一瞬が楽しかった」「幸せだった」という言葉が出てきました。残念ながら普段の私たちの生活の中ではなかなか耳にしない言葉です。何がそれほど楽しく幸せだったのか、と尋ねますと、その答えは決して「特別なものではありませんでした。

親しく挨拶を交わし、笑顔の中で過ごせたから、だったようです。そんな経験が普段できなくなっている私たちの社会こそいったいどうなっているのかと思わずにはおれません。フィリピンの人たちとの関わりを通して、私たちが忘れてしまった大切なことを見出し、なんとか取り戻していきたいと思います。

## 約束の地 「ヤコブ農園」

団長 ベイカー 博子

今回のワーク地となったヤコブ農園とは、そもそも東京の聖ガブリエル教会信徒の、フィリピンの為に役立ててほしいと言う遺言から始まった。以前、同教会の牧師をされていた関係から五十嵐主教様に使途の打診があり、長崎を訪問中のフィリピン中央教区のタクロバオ主教と話し合いの結果、トントン拍子に決まったようだ。そのいきさつとは、

中央教区のダグソン司祭は、長い間この地の山岳部族に接触し、忍耐強く宣教してきたが、その間、獲物も減って来て狩猟生活を継続して行くのが難しくなり、最近ではただ座して援助物資を待つのみ、と言う彼らの現状を憂い、なんとか自立、定住させたいと願っていた。そのビジョンを中央教区に訴えて来たが何しろ資金不足のため、実現にはほど遠く、子供達の教育さえ2年も延び延びになっている状況であった。実はフィリピン政府も約300人位と言われるこの部族を定住させるべく山と土地を与えてはいたが、農耕指導などはなされなかったため、狩猟生活しか知らない彼らには猫に小判で、ただ荒地のまま放置されていた。その中で、3家族の人々が意を決して稲作を始め自立の意志を見せたので、ダグソン司祭が彼らの土地を25年契約で借受け、モデル農園としての自立援助計画をたて、前述の献金がこのプロジェクトのために投入されることになったのである。そして、その実践の先駆けとなるべく九州教区のワークキャンプの参加者が、農園のあるサントイネス村に派遣された。

今回の作業は、動物の侵入防止用鉄条網柵作り、植林用穴掘り、野菜畑用土地の開墾、荒地全体の草刈り、など今迄と比べると相当の重労働で炎天下に文句一ついわず、地元教会員、山の民達と生き生きと、むしろ楽しく協働作業をしていた若者達や働き者のおばさん参加者に、本当に感心させられた。

献金者の洗礼名からヤコブ農園と名づけられたこの土地は、まずは、自給自足のための稲作、野菜畑から始め丘陵地には、換金作物としてマンゴー、ココヤシ、コーヒーなどを植え、その利益で、教会、学校、クリニックを建て、小型水力発電で電気も起こそうと、ダグソン司祭は目を輝かす。司祭の右腕でもあり今回食事をはじめ、全ての面でお世話になったクリスは、ゆくゆくは、この風光明媚な丘にコテージを建て、瞑想の地として都会の人たちを呼び込み、地元民との交流の場としていきたいと、夢を語る。その夢を共有するチャンスを与えられた私たちは幸せ者だ。来年もまた、サントイネスに帰って来ると若者達の決心は揺るがない。出来れば今後、東京教区からも参加してもらい長いスパンで、このヤコブ農園を少しずつ目に見える形に、夢を紡いでいけたらと切に祈ってやまない。

## 2010 フィリピンワークキャンプ日程と経過

### 3月 1日 (月)

出発式。PM7時より福岡聖パウロ教会で多くの支援者に囲まれて激励される。持って行く荷物の確認。宿泊。

### 3月 2日 (火)

教区センターをAM7:40出発。台北、香港経由でマニラへ。フィリピン中央教区より2台のクルマの迎えがあり、途中で夕食を摂ってホレブハウスへ。

### 3月 3日 (水)

早朝、フィリピン中央教区のみなさんに見送られて2台のジープに分乗してセントアグネス教会牧師館に到着。歓迎会をしてくださる。ダンスと音楽、自己紹介。ワークの説明を受ける。そのあとJコブ農場へ下見に行き、柵の杭打ちの位置に竹の棒でさして印をつけていく。牧師館で夕食。そのあとホームステイの振り分けをされる。

### 3月 4日 (木)

朝食を摂った後、すぐに農場へ。印をつけた場所に穴を掘る。炎天下のなかのワーク。野営トイレを作ってもらう。

### 3月 5日 (金)

山の斜面にマンゴー、パパイヤ、コーヒーを植える穴を掘る。草刈り。山の民の方々の応援あり。夕食の後、ハイスクールでダンスがあったので、参加して楽しむ。

### 3月 6日 (土)

農場で朝食。そのままピクニックへ出発。山の小さな教会で礼拝。そのあと川遊び。といってもその道のりの険しいこと、石、岩だらけ。そこで、野外ランチ。大勢の子どもたち、おとなたち合わせて約50名の参加。滝まで行って水遊び、ダイビングを楽しむ。

### 3月 7日 (日)

セントアグネス教会ですばらしい礼拝。夜は日本食サンクスパーティー。60名以上の参加があり、みんなで歌って、踊って、笑い合って、抱き合って大騒ぎの楽しいHAPPYパーティー。

### 3月 8日 (月)

ワーク。フェンスのコンクリート支柱をコンクリートで固定。河原から砂運び、水運びをしてコンクリートをこね、掘った穴に支柱を入れ、そのまわりを固定する。

### 3月 9日 (火)

最後のワーク。きのうのつづきのコンクリート作業。草刈り。農場に十字架を作り建てる。みんなで名前を書く。川で最後の水浴。夕食にも大勢の子どもたちが集まってきてお別れパーティーになる。

### 3月10日 (水)

牧師館の前から乗り合いジブニーに乗ってマニラへ。男性陣は、屋上に乗る。コレブハウスに着いたら、すぐに中央教区のコンベンションでワークキャンプの報告。

### 3月11日 (木)

観光と買い物。夜は、送別レセプション。それぞれあいさつをしたあとは、夕食、歓談、そして歌ったり、ゲームをして楽しむ。

### 3月12日 (金)

早朝、中央教区のみなさんの見送りを受け空港へ。香港、台北を經由して福岡空港へ。大勢のお迎えを受け、解散。

## ワークキャンプメンバー



Camp Leader  
Teacher (61)  
Likes nature and animals

(Elizabeth)  
Ms. Hiroko Baker  
Holy Trinity Church, Miyazaki



Camp Chaplain  
Clergy (64)  
Likes Music

(Catharine)  
Rev. Hiroko Yoshioka  
Holy Trinity Church, Miyazaki



Worker (29)  
Likes Kendo

(Andrew)  
Mr. Tetsuo Okazumi  
Resurrection Church, Kagoshima



Student (20)  
Likes sports

(Christopher)  
Mr. Keisuke Shibata  
St. Paul's Church, Fukuoka



Student (20)  
Likes Rugby

Mr. Munehisa Takeda  
St. Paul's Church, Fukuoka



Student (21)  
Brother of Manato

(Moses)  
Mr. Taiju Yasumura  
Christ Church, Nogata



Student (20)  
Brother of Taiju  
Likes Rugby  
(Abraham)  
Mr. Manato Yasumura  
Christ Church, Nogata



Student (19)  
Likes singing

Ms. Sayako Shigetomi  
Christ Church, Nogata



Housewife (61)  
Likes cooking  
(Jochebed)  
Ms. Mariko Sato  
Anglican Church, Kurume

# ワークキャンプレポート



## フィリピンワークキャンプの報告

鹿児島復活教会 アンデレ岡積鉄男

わたしたちの主イエス・キリストは、聖霊を通して時機にかなった預言と憐れみを与えてくれます。それをわたしたちがすべて享受するとき変容するわけです。

具体的に目に見えるかたちで変わることはなくても、そこには比べものにならないほどの平安がおとずれるのです。やっぱりそれと神の愛ですね。

今回の私の使命は、おそらくキツイであろうワークの中で、自分と真剣に対峙をし、「己に克つ」ということでした。それはそれなりに果たせたと思いますが、他人に迷惑をかけたことと、柔和な態度が足らなかったことが心残りでした。

今課せられている自分の課題に全力で立ち向かう姿は、多くの人の共感と交流を生み出したことも事実です。それによって、私には多くの人と交流できる仕事、もしくは多くの人と組んでやれる仕事が一番向いていると悟ったわけです。

しかし、そんなことちっともお金にはならないではないかという人があるかもしれませんので、それに対して反論したいと思います。

現在の経済学では、環境や状況があまりに複雑になったために、経済学を再考しながら、最終的に神のみ心になうような生きざまが最善です。なぜなら、保守派、急進派、リベラル派のそれぞれのメリットとデメリットをよく考えながら、相互干渉して試行錯誤する道こそ最高の道だからです。かといって、即、自由で民主主義的な理想の社会が、実現するには無理があるでしょう。そこで、世の中では中途半端と言われるようなことでも、市場と挑戦の相互干渉が必要なのです。

しかし、経済学だけでは真理の霊、すなわち自由の霊はわたしたちになんら悟りを与えてくれません。そこには、海外が一番ですが、実践で、日本という国を政治面でも経済面でも見つめ直し、歴史

的な解釈も自分の眼で見て体験することに尽きるはずです。

短く言えば、生ける神の神殿である私たちを天国にまで引き上げてくださる方がいらっしゃるからには、無駄を覚悟で自らの領域を、必死の覚悟、いわば、ハングリー精神で乗り切っていくしかないのです。

サンタ・イネスのおもてなしに感謝です。今回同時に参加できた方々にも感謝です。そして、わたしたちの平安無事を日本で祈っておられた方々にも感謝です。とにかく、10日間で出会ったすべての人々への感謝を今後も必ず持ち続けますよ。感謝なくしては、己惚れてしまって、私の人生は台無しになってしまいますから…。

また、今回のワークキャンプで、お互いに成長できたかどうかは分からないと察しますが、断言します。「多くの兄弟姉妹よ、あなたがたは救われた。何よってか、天使たち、そして、謙虚に言いますが、父と子と聖霊のみ名によって…」。

姉妹教区の成せる業は計り知れない。姉妹教区という名案を生み出したアングリカン・コミュニオンの仲間たちにも豊かに聖霊と生きる sacrament がありますように。

そしてなにより、この関係の原点である、五十嵐主教に感謝です。

## 2010年ワークキャンプ

直方キリスト教会 安村 大樹

日本を出て、そこで地元の人たちと一緒に活動をするというのは、自分の中に多くのものを残してくれる。それを学生のうちに体験できたというのは自分にとって大きな財産となった。

マニラの空港に着いてから、とんでもない岩道と川を歩き車で3時間、セントイネス村に着く。さらにそこから30分ほど歩くと今回のワーク地、ヤコブ農園

# ワークキャンプレポート



がある。ここは移住を繰り返す狩猟民族を定住させるために開かれた農園である。安定して作物が採れるようになれば多く人が集まり、学校、病院とゆくゆくはコミュニティを形成していきたいと熱く話していたエンジニアはとても印象的だった。農園と言っても山あいを開けた荒地で、まだまだ手始めの段階だった。道路と農園の境に動物除けのために柵をはったり、マンゴーやバナナなどの樹木を植えるための穴を掘ったり、ここでのワークは主にこういったことだった。当然電気ドリル、ショベルカーといったものがあるわけもなく、シャベルを持った自分の体が主なる機動力だった。30度を超す気温の中こういった肉体労働が意外と楽しく、しっかり汗をかいた後の川での風呂は本当に気持ち良かった。

フィリピンは出生率が高く、今回滞在していたセントイネス村にも多くの子供がいた。この村の子供たちは非常に好奇心旺盛で、我々日本人にも積極的に話しかけてきて滞在1週間の中でも多くの子供と仲良くなれた。遠いところから来てくれてという歓迎の念は十分すぎるほど感じたが、村で生活していて日本人に対し何かを期待するといった感じはまったくなかった。一部海外の国ではこういった感じを受ける事もあるだけに、ここの人たちの純粋さに触れることができたのは本当に幸せなことだと思う。

帰ってきてからもずっとフィリピンのことを思う。あれだけ楽しく充実した10日間を思うと、少し日本での生活を寂しく感じてしまうほどである。自分の中で少し残念だったのは自分の英語力である。フィリピンの方からの質問には答えることができたが、自分から思うことを言葉にできればもっと自分のこともアピールできたし、相手のことも知ることができた。現地の人とコミュニケーションを英語でもっとはかりたいと思うだけに悔しかった。ヤコブ農園は間違いなく忘れることのできない土地であり、今後

もここ発展にできれば現地で関わっていきたい。今度はしっかりした英語力を身につけて。このワークキャンプに参加できたこと、セントイネス村、ヤコブ農園に出会えたこと本当に感謝です。

## フィリピンワークキャンプ

直方キリスト教会 安村 真尚人

最悪の気分で帰国した。体調管理不足により風邪をひき、現地のかき氷を食べたおなかを壊し、挙句の果てには飛行機に乗り中耳炎になるという始末・・・それでもまたフィリピンに「帰りたい」と思わせるのは、フィリピンには体調不良なんて全く苦しめないぐらいの魅力が溢れているからではないかと思う。私が今回のワークキャンプで感じたフィリピンの魅力を、この文から少しでも感じて頂けたら幸いである。

福岡空港を出発し、マニラについてまず感じたことは、暑い。とにかく蒸し暑い。ケンタッキーで食事をし、コーラを飲むとその暑さが一気に吹っ飛び、あらためてカーネルサンダースやペンバートの偉大さを実感したりしなかったりしながら初日を終えた。

二日目に今回の目的地であるサントイネス村に向かった。サントイネスも暑かったが、湿度は低かったのでマニラに比べると非常に過ごしやすい気候だった。

三日目から本格的な仕事が始まり、プログラムにはひたすら“WORK”という文字がならんでいたのもどんなものかと少し恐れていたが、そこはやはり過労死という言葉とは全く無縁の国、それほど大変なものではなかった。しかし、働く時間は短い働く時はよく働く。動物除けの柵を立てるための穴掘りが主な仕事だったのだが、私たちが一つの穴を掘っている間に、現地人は二つ三つと軽々掘っていく。仕事を手伝いに行った

# ワークキャンプレポート



はずが、足を引っ張っているだけではないかこの時ばかりは悲観的にならずにはいられなかった。しかし、そんな私たちにフィリピンの人達は本当に良くしてくれた。表面的な優しさではなく、心から私たちのためになることをしてやろうという思いがひしひしと伝わってきた。世間一般的に日本は裕福な国だと言われている。しかしこの優しさを受けて、お金があることがはたして本当の裕福と言えるのだろうか、深く考えさせられた。

四日目以降もワークを中心に、ピクニック、キャンプファイヤー、スポーツなどのさまざまなアクティビティを通して現地の人々と交流した。この村には子どもが多くおり、彼らとの交流が一番の良い思い出となった。かろうじて自分の名前が言えるくらいの英語力である私でも多くの子ども達と仲良くなれたのは、間違いなく子ども達の温かさや純粋さのおかげだと思う。

日本では決して味わうことのできない充実感を感じながらの生活は、とても中身が濃く、あっという間に過ぎてしまった。サンタイネスを立つときに彼らが言った、「お前達はもう家族なんだから、いつでもここに帰って来い。」という言葉は、決して忘れない。冒頭で書いた「最悪の気分が一番の理由は、もしかするとフィリピンを離れたことだったのかもしれない。いつか必ず、できればまた来年、フィリピンに、サンタイネスに、「帰りたい」と思う。

最後に、このフィリピンワークキャンプを支えてくださったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

## 2010フィリピンワークキャンプ

福岡聖パウロ教会 柴田 敬介

まず最初に、今回のフィリピンワークキャンプに参加できたことに感謝したいです。

僕は今回の参加で2回目でしたが、このイネスという場所には前回の所よりも子どもが多くて驚きました。イネスについてすぐに歓迎会があり、そのおかげで向こうの子どもたちとすぐに仲良くなることが出来ました。

今回のワークは植林するための土台作り、いわゆる穴掘りが中心でした。ワークは意外に重労働だったけど、参加者のみんなとわいわい楽しんでやれたので、全然きつくなさく楽しくワークすることが出来ました。将来は、マンゴーやココナッツ、コーヒーの木が植えられ、そこに学校や病院、宿泊施設なども作る予定だと聞いて、このファームがこれからどのように変わっていくのかを、随時観察していきたいと思いました。と、言うことは来年も今回の場所、イネスに行きたい、これはそれだけイネスのインパクトが強かったということだと思います。なぜ、こんなにインパクトが強かったのか、それは向こうの人との深い交流によって生まれた、「絆」のようなものがあるからだと思います。

1回目のワークキャンプでもその様な感覚をおぼえたけれど、今回は2回目の参加ということですので経験があったぶん、より親密になれたのではないかなと思います。

夜にホームステイ先で現地の人とお酒を飲んで談笑したり、昼間にみんなでワークをすることを通して、向こうの人の心の温かさを体全体で感じる事が出来ました。このような経験は普段そんなに出来ることではないと思います。だから、この経験は自分にとって宝物になると思います。今回のワークキャンプで、またフィリピンに来ることができ、そして前回のようにフィリピン独特のゆったりとした時間の流れと優しい空気に触れることが出来るとてもうれしかったです。フィリピンにいた時間の一瞬一瞬がうれしくて、それはかけがえのないものになりました。また是非行きたいと思います。



# ワークキャンプレポート



## 来年もフィリピンに行って

福岡聖パウロ教会 武田 宗久

去年初めてフィリピンを訪問してからずっと、私はまたフィリピンに行けることを楽しみにしていました。そして今回のキャンプも当たり前のように参加することを決めました。

今回は去年とは違いマニラ北部に行きました。マニラに到着し外に出てあの“もあつ”した暑さを肌を感じた時、「ああまたフィリピンに来れたんだな・・・」と言葉がもれました。イネス伝道所に着いて、シルベスター司祭がとびっきりの笑顔で迎えてくれました。本当にフィリピンの人たちはこのような純粋な笑顔を大人も子供もします。みんな心から私達を歓迎してくれているのだと強く感じました。

むこうに着いてからすぐにワークが始まり、ひたすら穴を掘る作業が始まりました。とがった鉄の棒とスコップというシンプルすぎる道具で、いくつもの穴を皆で力をあわせて掘っていきました。何度も日本の工事現場でドリルを使うおじさんが頭を過りましたが、もしそんな道具を使っていたら、大きな石をやっと掘り起こしたあとのハイタッチもなかっただろうし、その後に入る川のお風呂も気持ち良くなかっただろうと思います。ワークから帰ってくるとごちそうが待っていました。私達のために作ってくださった料理はどれも本当においしかったです。それに毎日違う料理を用意してくださったのにもびっくりしました。夕食を終えると1つのテーブルをかこんで現地の大人たちとブランデーを飲みました。そこで色んな話をしました。シルベスター司祭が、何年後かには農園を完成させ様々な作物を育てて農園までの道も整備して山岳民族も定住してもらって皆がそこで働けるようにしたいんだと、熱く語っていたのが印象的でした。

去年と違って驚いたことは、子供がとても多かったことです。その子供たちと毎日のように遊びました。ビリヤードに行ったりバスケットをしたり歌ったり踊ったり、恋なんかもあったりして・・・。現地の子供たちは本当に元気で純粋でした。最後の別れがとても悲しかったです。

今回のワークキャンプで思ったことは、また行きたい！とまた思ったこと。そしてもっと英語を勉強しようと、また思ったことです。来年もフィリピンに行って現地の人ともっと仲良くなりたいです。

## フィリピンワークキャンプ感想文

直方キリスト教会 重富 紗也子

今年もワークキャンプに参加する事ができ、また無事に終わることができ、関係者の方々への感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

去年初めて参加して、沢山の経験から色々なことを感じることができました。フィリピンに対する思いが芽生え、知識を得て、希望、目標、少々後悔も感じ…。様々な思いを自分の中で整理してみると、ワークキャンプメンバーとしてもう一度フィリピンに行こうという決意が生まれ、今年も参加することにしました。

今回のキャンプ地である、イネス伝道所は、去年のキャンプ地のタグサオの村とはまた違う印象を持ちました。電気、ガス、水道があることから生活面での不便さはあまり見られず、ある範囲内に、小学校から高校までの学校や様々なお店、病院があったりと、地域性が高かったように感じました。

イネス伝道所で過ごした日々は、毎日がすごく充実していました。今年も沢山の人々に支えられてのワークキャンプでしたが、去年と同様に、やっぱりフィリピンの人たちはあつたかいなあ～と感じました。子どもから大人まで沢山のひと

# ワークキャンプレポート



交流できたことを、本当にうれしく思います。

さて、ワークの話題に移りますが、今回のワークはまさにWORKでした。作業場となったのは、足場があまり良くない山を30分ほど登ったところにある、ジェイコブズファームと呼ばれる場所です。いまはまだ農場らしきものは田んぼと小さな畑のみの大自然ですが、将来的に大きな農場を作るということを目標にしています。作業の内容は、主に穴掘りでした。フェンスをつけるための支柱を立てる穴を道沿いに、いずれ植林する予定である、マンゴー、ココナッツ、コーヒーを植えるための穴を山裾に掘りました。他にも、支柱をコンクリートで埋め固めるために必要な砂利運びや、山の草刈りなどをしたのですが、これら全てが炎天下での作業でした。それに加え、穴掘りに関しては、地面は石だらけというよりも岩だらけだったので相当な重労働でした。にもかかわらず、向こうの人たちは何食わぬ顔で黙々と働いていました。それに作業が早い。砂利運びに至っては、私が運んだ重さのおそらく2倍以上の重さの物を、60過ぎの女性が軽々持ち上げ運んでいました。圧倒されながらも、私にはよい刺激となり触発され、共にいい汗を流すことができました。とはいえ、やはり向こうの人のパワーには勝てません。私も色々お手伝ったのですが、体力的にも技術的にもできることは限られていました。なので、少しでも力になれていたのなら幸いです。

私の今回の目標は、「参加する」だけじゃなく「作っていく」ということでした。その理由は、どんな小さなことでもいいから自分からなにか働きかけてみよう、と思ったのが去年のワークからの反省でした。それから、大学に進学し親元を離れて暮らすなど、1年で大きく環境が変わったのですが、成長するどころか、その変化を理由に甘えることのほうが強くなっているように感じていました。そんな自分から卒業する意も込めて参加し

た今回のワークキャンプ。参加して本当によかったなと思えている自分がいます。自らが進んで行動を起こすことはとても勇気がいると思います。しかし、きっかけ次第では本当の自分、新たな自分と出会えることがわかりました。私もジェイコブズファームも走り出したばかりですが、その成長を分かち合うべく、これからもファームの成長と発展に何かしらの形で携わることができたらなと考えます。10日間という短いけれども非常に充実した時間の中で感じたこと、学んだことを生かし、さらに自分自身を磨いていけたらいいなと思います。そして、また必ずジェイコブズファームの地に立ちたいと思います。

## シニアだってワークキャンプ

久留米聖公会 佐藤真理子

「60歳になってもフィリピンワークキャンプ参加できますか?」「もちろん、大丈夫です。」山崎司祭の返事でした。こうして出かけたのでした。

フィリピン中央教区の全面的サポートは、心強い限りでした。昨年末のアドベントツアーに参加していたため、なつかしくうれしい再会でした。そのときは、わたしの娘や、2歳になる小さな孫も一緒だったこともあり、とてもよく覚えていてくださいました。

山越え、谷越え、川越えで到着した聖アグネス教会の牧師館では、民族衣装を身につけた少女たちがファーザーの手作り楽器のリズムに合わせて踊りで歓迎してくださいました。とてもうれしく、目の奥が熱くなりました。そのあとは、いつも、どこでも多くの子どもたちが、わたしたちのそばにいてくれて守ってくれたのです。川をわたるとき、丸太のうえをよろけながら歩くときは手を取ってくれます。歩くのが遅くなれば、それとなく待っていてくれました。そんな心遣い

# ワークキャンプレポート



がどんなにうれしく、ありがたかったことでしょう。青年たちとは、違ったシニアへの接し方が。このキャンプでは、大勢の子どもたち、もちろんおとなの方もわたしたちを心から歓迎して受け入れてくださったからこそ、楽しく働くことができたのです。

さあ、きょうもしっかり働こうと張り切ってホームステイの家から毎日、朝もやのなか牧師館へ向かいます。そして、朝食をすますと洗濯物、飲み水をリュックに入れてJコブ農場へ。石ころだらけの道、そして川をふたつ渡って30分の通勤です。急いで川で洗濯をします。帰るときはすっかりかわいているからです。スコップやナタをもつての作業、半分に割った椰子の実で掘った穴の土をかき出す、セメントをこねるための水運び……。ランチはお祈りのあと、みんなで木陰で大盛りライス。そのおいしいこと。

作業のあとは若者たちと水牛もいっしょに、全身あせもになったからだの汗を流し水浴です。見上げれば真っ青な空。まわりには大きな椰子の木々がそびえ、ローカルな家が遠くに三軒、水辺には自生のハイビスカス。こんなすてきなロケーションに心地よい疲れをと充実した気分できれいな川に身を横たえている自分の姿など想像もしなかったことです。

サンクスパーティーでは、日本料理を披露しました。カレーライス、煮物、即席漬、そして抹茶のお薄を差し上げました。60人ほどのお客さま、多くは子どもたちですが、おいしいと好評でした。抹茶に、レモンを入れておいしいというのには驚きでした。牧師館のキッチンには、夢のキッチンでした。たくさんの料理を覚えめました。なにより、楽しく、それは、料理長だったわたしの敬愛するママクリッシュの手ほどきを受けることができたからです。ことに味見は、うれしく、まわりの子どもたちともことばは通じなくても食べることでじゅうぶんに通じ合えるのですから。そのうち、歌がはじまり、

ダンスさえキッチンで……。

この、ワークキャンプがどんなに楽しくわたしにかけがえのないすばらしい体験をさせてくれたことか……。

いつも、神様がそばについてくださることを実感し、感謝の日々でした。

祈りのとき、メンバーみんなが、そしてわたしたちをサポートしてくれているまわりの子どもたち、その子どもたちを育てているおとなみんなに、神様がいてくださっていることを思い、感じる事ができたからです。

シニアだって、歳を重ねてきたからこそこの感覚、喜び、充実感があるのだとうれしくなりました。

## 私が変わられるのは？……

宮崎聖三一教会 吉岡容子司祭

今年の現地での「労働」やまた根拠地であった村の人々のありさまなどについては他の人々が記しているの、それは割愛し、私としては「自省録」にもならぬような想いをここに。初めての海外、つまり初めてのフィリピンを経験したのが昨年3月のフィリピンワークキャンプ。衣食住にはこだわらないから、電気水道なし、ときいても別にそれはなんという事もなけれど、そもそも「外に出たい」という想いの希薄な私とて、勿論、自分で志願したのではなく主教さまのご命令によって。とってイヤイヤ行ったのではないのは確かなれど、このように次ぎもまた次ぎも、「行こう」という想いになる、などとは予想の外。フィリピンで私どもが接する方々はまずはフィリピン聖公会中央教区教役者始め関係者、そして司祭の牧する教会の人々とその村の人々。昨年も今回もとにかく、すべての人が「なぜ、そのように？いつも笑顔、いつも歓待、それもごく自然に自然に」なぜ？

# ワークキャンプレポート



今回、帰国後の振り返り会で自分の感想を言う折りに、「辛いことなどは全くなくて、日本にいるほうがよほど精神的に辛い事があって」と、つい、ポロっと言ってしまい、「ダカラ彼女は辛さから逃げるために何度もフィリピンに行くのです」とその場で揶揄されてしまったのだが……。勿論、フィリピンの人々として日々の暮らしと「生きる」という事において、辛さのないわけがない。見える次元でも見えない次元でも。仕事の辛さ、思惑通りにいかない人生、家族についての悩みなどなど、人間、生きる以上は、地球上どこにしようとはこれは本質のはず。にもかかわらず、どうしてあのように？ 始めてのフィリピン体験の時から3回目の今回まで、この不思議の疑問と感慨は全く変わらない。今回の村の人々や子ども達の姿のみならず、教区で働く若い若いベニーさん、彼女の前にその大変な役割を負い続けられたシャロンさん（ダグソン司祭夫人）、また聖公会ではないが超教派的に種々の貴重な役割を果たしているまさに「不思議の人物、いやウルトラ人間」クリシュさん、半日だけ私どものマニラでの買い物案内として依頼されて付き添ってくれた若い女性、現地の村で私どもの「ボディガード？」として雇われていた男性二人、その他すべてが「ごく自然で暖かなしかし私には不可能な仕事の果たし方」！

神様、なぜ、彼／女らは、あのように生きて」いることができるのですか。彼／女らにできて、していて、私にできない、のはなぜですか？ フィリピンがキリスト教国だから、などという類の言葉は全く答えのかけらにもならない。すさまじい貧富の差、その故であろう、一旦事あれば略奪も起きる社会、また、マニラのホームレスたちの痩身と険しい顔つき。フィリピン聖公会自体の中でも教役者各自の置かれた立場のあまりの違い。にも関わらず、教役者たちは皆、えがおえがお。日本で会っても向こうで会

っても。私には私の置かれた場があるのだから、その場で求められていることを誠実に果たしていくの他はなけれどしかし、3回もその人々に取り巻かれながら、日本でそのように生きてはいない自分。ウーン、と唸りつつ、すみません、これが今回の感謝と自省の乏しい言葉です。以上。

## サントイネスの奇跡？

宮崎聖三一教会

ベイカー博子

何度行っても、また行きたくなるフィリピンワークキャンプ。今回もたくさんの天使達と出会えたし、大いなるお恵みを頂いた。

今回のサントイネス村にあるヤコブ農園についてのいきさつと、今後の展望については別レポートで述べたとうりである。昨年12月のアドベントツアーの「はばたく」とあわせて読んでくだされば、よりよく解ると思う。ここでは私事の報告を試みたい。

実は昨年ツアーで農園の下見に行った時、村から農園までの山の悪路で足に豆ができ、もう少しであきらめるところであった。途上国搾取型体型のうえ、日本では全く軟弱な生活をしているので、「これは困った事になったぞ。」というのが第一印象であった。2年ほど前から左脚を痛めていて、しゃがむ姿勢をとるのが難しいうえにツアーから帰った後も小事故で、太ももと足の甲を痛めてしまい1月末頃迄、跛を引きながら歩いていた有様だった。あわててリハビリまねごとを始めたが焼け石に水である。ワークの戦力としてはゼロと解っていても参加する、この厚かましき。

ワーク第一日目から、農園まで歩くのが私の難関で、けがをしたら医者も医療施設も無い村である。狭い岩だらけの凸凹道を、足をひねらないよう、道が半分崩れている所では、崖下に落ちないように、

# ワークキャンプレポート



泥水や水牛のフンで滑らないよう、川を渡る時は水の中に転ばないように、40分くらい細心の注意を払って下ばかり見ながら歩くので、農園に着いた時にはもうぐったりで、帰りの英気を養うので精一杯、同年代の吉岡先生や佐藤さんが草刈りなどして働いておられるのに全く面目ない事であった。

さらに3日目には、私にとって恐ろしいスケジュールが組まれてあった。聖マテアス教会での礼拝とピクニック、その場所とはさらに山奥を2時間位登った2山目の山頂とある。正直私は、この日は村に残ろうと内心思っていた。しかし、その日になるとそんな雰囲気ではなかったので、とにかく、行ける所迄行ってみようと思心して出発した。やはり悪路続きで当然びりである。地元のジュンさんやペトロさんの助けのお陰でなんとかたどり着けた。そして、そこでの礼拝はその苦勞を忘れさせてくれるほど素晴らしかったのである。花柄の布をまとって歓迎の歌を歌ってくれた内気な山の民の子ども達は、正に主教様が言われた天使達であった。言葉は違っていても、主の祈りや聖歌は解るので、こんな忘れられたようなへき地にも同じ主を信じ従う、神の家族がいるのを実感して、61歳の私を揺さぶった。

しかし、その感激に浸るのは甘かった。「さあ、お腹もすいたし近くの滝でピクニックだ」と着いていくと、まず、ほとんど垂直の崖を、下りろと言う。「ヒエー——体誰の考えなのだ」と文句を言いつつ、後ろ向きにこわごわ下りると、次は大きな岩を何度もカエルのごとくへばりついて上ったり、下りたり、日本だったら絶対立ち入り禁止区域だと思いつつも行かざるを得なかった。何しろ77歳のおばあさんも子ども達も山の民はゴム草履でひよひよいと岩の上を跳んで行くのだ。

50人近い老若男女が、その後の滝壺ジャンプも含めて誰もけが一つせず帰りつけたのは、私には、奇跡に近いと思わ

れた。吉岡先生さえ、「ベーカーさん、よく生還されましたねー」と言って下さったのだから。

しかし、神様はこんな私に更に、贈り物を隠しておられた。ワークもなんとか無事終えて、帰国して2、3日たった頃ふと、左脚が曲がるのに気がついた。いまでは2年振りに正座さえできるようになって、驚いている。あの悪戦苦闘の山歩きが自然のリハビリになっていたのだろうか、これも奇跡??と呼んでは言いすぎだろうか。

だから、ワークキャンプは止められないのである。大変で、きついことでも、全て喜びにかわるし、つらいという感覚は無い。あなたも、是非、次のプロジェクトに参加して、私たちやフィリピンの仲間と一緒に神様の仕事を楽しみませんか。